PDF-XChange Viewer
Click to buy NOW!
www.docu-track.com



## 世界教会協議会釜山総会に参加して――

# 福島の放射能禍を発信

## アジアと宗教の可能性

日本基督教団仙台市民教会
主任担任教師（東北ヘルプ事務局長）
川上　直哉

10月30日から11月8日まで、韓国釜山において、世界教会協議会（WCC）第10回総会が開催された。世界中の教会から825人の代議員が出席し、その他参加者は3500人を数えた。この「その他参加者」として、東北震災への支援の感謝と福島の放射能禍の現況を世界に発信するべく、筆者は7人の仲間と共に全日参加した。そこで学んだことは、世界の中の日本の課題であり、善意の限界であり、そしてアジアと宗教の可能性であった。以下に報告する。

### 1 「世界教会協議会＝World Council of Churches（WCC）」とは

千年単位の歴史を経て、キリスト教はイスラム教・仏教同様、世界の広範囲へと伝播している。この伝播の中には人為的・戦略的に展開されたものもあった。日本で有名なのはキリシタン・バテレンの活動であろう。これは巨大なカトリック教会に対してプロテスタント勢力が蜂起した西欧の状況を背景に、カトリック側からの巻き返しとして、その信徒を新たに獲得しようとする運動であった。その後、黒船が来航するころ、プロテスタントもアジアおよび日本に信徒を獲得しようとする熱意を漲らせた。その時派遣された人々を「宣教師」と呼ぶ。

世界に版図を拡大しようとする熱意は、帝国主義の空気と一体化していた。そして世界大戦が2度も起こり、人類的な規模での反省に至った。特にアジア太平洋・アフリカの「植民地」から帰国した宣教師たちが、欧米のキリスト者に深い反省を促す触媒となった。そして1948年オランダで第1回WCC総会が行われた。これはプロテスタント側の反省の具現化であった。この運動に東方正教会も参加した。同様に、1962年に第2バチカン公会議が開催され、カトリック側からの（さらに徹底した）反省と刷新の運動が起こる。

このように、WCCの歩みは「植民地主義の反省」として確認することができる。そのように確認するとき、今回の第10回総会の意味と今後の展望が拓けてくる。

### 2 日本とWCC

日本にとってWCCは疎遠ではない。WCCは総会の他にも国際会議を開催しているが、その一つ「東北アジアの正義と平和会議」は1986年に静岡県御殿場市で行われ、南北朝鮮の平和統一のために世界の教会が取り組む行程案を策定した。その成果は「東山荘プロセス」と呼ばれ、現在も国際的連帯の一端を担っている。

過去、日本は、WCCとそれに統合されていく世界運動に、積極的に関与してきた。1948年以来7年ごとに行われたWCC総会に日本人は中心的な役割を担い、第3回総会の開催地として東京が名乗りを上げ（結果はインドとなる）、1920年と1958年には世界キリスト教教育大会を東京で開催している。特に1958年大会においては、主催国としてこれをアジア諸国への謝罪表明の場とするべく活発な国内募金を行い参加者を迎えた。

1954年に米国において行われた第2回WCC総会において、日本の教会は重要な役割を果たした。時まさにビキニ水爆実験による第五福竜丸事件が起こったばかりであった。日本代表団は日本から原水爆禁止の署名3万4千を集めて持ち込み、熱心に総会参加者を説得し、遂に「核兵器の禁止」を世界教会の名において宣言させるに至った。

そして今回の第10回WCC総会があった。筆者は福島原発爆発事故の現実を訴え、全ての核エネルギーへの否を世界教会として表明するよう働き掛けを行った。その運動は2012年9月の仙台から始まり、日本・韓国・台湾・ニュージーランドを核とする世界的連帯を生み出し、「核から解放された世界を目指す決議文」を総会本会議に上程、採決を迫るに至った。本会議は議長による異例（異常？）の議事運営と、英国保守党国会議員でもある代議員の反対演説等があり、決議文を継続審議事項とした。その決定の際、議場は地鳴りのようないら立ちの声に騒然となっていた。

## 核から解放された世界を目指す決議文

## 継続審議決定に議場騒然

### 3 悲劇の博覧会・善意の限界

継続審議となった決議文は、世界教会の状況をよく示すものとなっていた。第一に、この決議文は「アジア太平洋」を主題としていた。第二にそれは、太平洋に展開する米軍基地（沖縄を含む）の生み出す悲劇への言及とともに原発問題を論じるものとなった。

キリスト教会の現状は、欧米からアジア太平洋・アフリカへと、その中心を移しつつある。中心が移りつつあるこの地域は、多様な文化宗教の坩堝（るつぼ）であり、成長と活気に漲り、紛争と混乱の渦中にある。その中で、「福島原発事故」は、霞む。難民・貧困・誘拐・小児売春・大規模環境汚染・民族紛争・宗教迫害・巨大災害そして政治的腐敗。これらがむき出しになっているのが、アフリカであり、そしてアジア太平洋である。そこでもし「自分たちの問題を！」とだけ熱心に訴えるならば、他の問題解決を阻害することもあり得る。それほど問題があふれ返っている現場に今、世界教会は向き合っている。

WCC会場には広大なブース展示場が設営され、世界中のキリスト者の奉仕活動の様子が紹介されていた。それは、さながら「悲劇の展示場」の様を呈した。筆者もニュージーランドと共同で「災害における教会の役割」を主題とするブースを展示し、本年8月の福島第1原発爆発事故現場付近の様子を録画してビデオ上映した。筆者のブースの目の前は、国連による難民の写真展示となっていた。

筆者らが出展した「災害における教会の役割」ブース

そこに写る難民の厳しいまなざしに見詰められながら、考えるところは多かった。被害者が互いに足を引っ張り合うようではいけない。他の問題を自分の問題とできる、自分の問題を他の問題の中に見いだしていただける、そういう言葉が、必要だ。それがないから、私たちは負ける。ただの善意には、限界がある。一個の善意を超える広がりを獲得しなければ、善意の運動は、必ず負ける。

実際、厳しい緊張の中で決議文は作られた。基地の問題は喫緊の課題である。連日、世界のどこかの基地で悲劇が起こる。その犠牲者に連帯することを表明しなければならない。しかし、フクシマの問題もある。緊張感あふれる会議中、まず、基地の問題を訴える人々が原発の問題を訴える人々に宣言文の標題を譲った。

そして宣言文の内容に、基地の問題が明記されることになった。原発を訴えた人々は、総会内プログラムにあった基地の問題を訴えるワークショップに大挙して参加し、感謝と連帯を表明した。こうして決議文は作成され、そして今、その決議文は来年7月に行われる再議論の時を待っている。

## 世界の良心と善意 決して眠ってはいない

### 4 アジアの可能性・宗教の可能性

WCCにおいて、筆者はアジアと宗教の可能性を学んだ。アジアの可能性は「顔と礼」でつながるコミュニケーションにある。基地と原発は、論理的には全く別の議論となる。しかし、それぞれの問題を担う人間の顔がつながる。譲り譲られる中に恩義と礼節が生まれる。それはアジア的文脈においては連帯の靭帯となる。多様性にあふれるアジア太平洋・アフリカにおいては、この種の連帯こそ求められるものとなる。

「核から解放された世界を目指す決議文」は採決に至らなかった。同様にWCCと前後して行われた世界宗教者平和会議世界大会においても、核発電所（原発）の非倫理性を明言する声明の発表は、日本側からの強い要望にもかかわらず、見送られたという。

そして筆者はまた被曝（ひばく）地フクシマの現場に戻った。可能性はこの現場にある。「原発と原爆は違う」「もっと科学的な検証を」「経済的発展の阻害だ」といった意見がある。しかしそれらの意見は、被曝の現場において消え去る。現場で呻吟する人々の存在は、机上の空論を雲散霧消させる。

その呻吟に寄り添い、不安の中を歩む人々の人生に伴走すること。そのための希望を探し、絶望に抵抗すること。それがわれわれ宗教者にはできる。だからわれわれは粘り強く声を上げ続ける。世界の良心と善意は、決して眠ってはいない。それらが動き出すまで、われわれは現実の困難を乗り越え続ける。そこに、宗教の可能性が示されると信じて。

以上、第10回WCC釜山総会で筆者が学び取った一端を示した。

PDF-XChange Viewer
Click to buy NOW!
www.docu-track.com